差別をなくすにはどうしたらよいのか

スポーツ健康科学部　スポーツ健康科学科　1115190105　上月　洋季

　まず始めに、悲観論として「差別的行動や偏見に基づく思考は、人間が環境への適応のために獲得した正常な心理機能を根ざしていること、その機能はわれわれの意識を越えた形で働くため、これを統制することがきわめて困難」と唱えられているが、私は差別をなくすためには、様々なことが必要になると考える。例えば、まずは相手の立場になって考えることを強化することであると考える。しかし、聞こえは良いが実際問題難しいことである。特に日本人は、相手の立場になって考える、自分より相手優先のような心構えは自然に身についている人が多いと捉えているが、これが万能ではないのが差別を引き起こす原因になっていると考える。実際、今回のコロナウィルス下では公になっているのではないだろうか。ニュースや新聞等で見たコロナウィルスに感染してしまった地域住民をけなし、無視するかような態度や心ない発言をして、命の危険や自分では理解しにくいことが起こってしまうと自分優先になってしまうことが伺えた。次に誤った情報に流されないことや情報に振り回されないことであると捉える。近年、ＳＮＳの普及により従来のテレビやラジオ、新聞だけでない情報源が発達している。このＳＮＳが最も差別を助長しているのではないと個人的に捉えている。ＳＮＳは誰もが気軽に使えるものであり、誰もが情報の発信源になれ、短時間で多くの人に情報を流すことができるがこれが徒となっている。誰もが情報の発信源になれるということは、嘘の情報や思い違いの情報でさえ簡単に流せてしまうのである。これが今回のコロナ禍で大きな問題となった。地域でコロナウィルス感染者が発生し対処に当たった病院が「コロナ病院」と住民の間や電話、ネット等で噂され、病院の利用者が大きく減少し、経営に打撃を与えただけでなく、一度情報が広まってしまうと地域での病院職員に対する差別・偏見は簡単に消えるものではなく、医療崩壊につながっていることが報告されている。このＳＮＳやネット等の発達により、ますます1つの情報に左右されている人が多くいると見受けられる、この情報社会においてメディア・リテラシーを高め、正しい判断を下し、ネット上の情報を鵜呑みにし、講義でも学んだ差別や偏見を助長する傍観者になってはいけないと捉える。最後に、自分の考えをしっかり持つことであると考える。私は、差別が起きるのは多数派が少数派を不当な扱いをすることが根本にあると捉えている。しかし、その多数側の中には、自分を守るためやただ味方が多いといった思考停止した理由で多数派につく傍観者が多いのではないかと考える。だから、差別をなくすためには一人一人が自分の考えに従って傍観者にならず判断を下すことであると考える。ここまで差別をなくすための取り組みについて論じてきた。現在やこれからを踏まえて、グローバルにテクノロジーが発展してきていることも考慮するとこれからより一層頻繁になる情報社会において矢張り正しい情報の選別は、差別や偏見を助長しないために必ず必要になってくると考えられる。

参考文献

「今、差別を考えるー社会心理学からの提言―」

[[14-21]\_第61回総会\_論文集-08\_研企シ.indd (jst.go.jp)](https://www.jstage.jst.go.jp/article/pamjaep/61/0/61_16/_pdf)

炭谷茂　「コロナにおける医療従事者の人権問題」